
流れる涙は罪色で

梓川ルリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れる涙は罪色で

【Nコード】

N0606Q

【作者名】

梓川ルリ

【あらすじ】

宮野若奈は某中高一貫校に通う一見普通に見える少女。

クラスメイトであり、親友でもある明音、由紀、双子の妹の春奈と日常を楽しんでいた。けれど、その日常はそれぞれの複雑な心情により、壊れかけている脆弱なもので……。

序章（１）（前書き）

別のサイトで、ルリという名前で書いている話をこのサイトでも書いてみます。

たくさん感想をもらいたいです。短くてもいいので、感想をお待ちします。

どうぞよろしくお願いします。

序章（１）

どこからか、誰からか流れた噂。

彼女は確かに存在します。

証拠なんてありません。けれど、存在するのです。

彼女は神出鬼没で、様々な場所に姿を表します。それは何故か執着を感じさせられます。

そんな彼女は夜闇の中白く輝くため息が出てしまうほど大きく立派で不思議な、レンガ造りの洋館に住んでいます。

そして、洋館を訪れた貴方に言うのです。初めて会ったにも関わらず、ぶしつけに言うのです。

「初めまして。貴方に願いはある？」

過去が在り、現在と繋がり、未来が編みあげられる。

序章（2）

影さえも塗りつぶしてしまうような、暗く、寂しすぎる広々とした部屋。大人二人が両手を目一杯広げても手が端から端まで届かないほど大きな窓から、月明かりが部屋に差し込んでいる。けれど、それは客観的に見て大きいと表現されるであろう窓から入ってくる明かりにしては、少なすぎて。僅かという言葉に幸か不幸かしっくり当てはまっている。

大きな窓が一つあるその部屋に家具と言えるものはほとんど無い。唯一、壁に洒落た青の画鋏で留められた鏡だけが家具と言える。

鏡は成人女性の平均身長ほどの高さ。成人女性三人が横に並んでも、一人もかけることなく映ることができるであろう。それほど縦横が大きい。それ程の大きさのだ円形の鏡は、滑らかな木にはめ込まれている。木は彫刻刀のようなもので彫られ、幾何学的な模様が付けられている。アンティークというもののかもしれない。

けれどその鏡が映すのは淀んだ、この世のものとは思えない色。強いて言うならば、灰色。そんな、何故か映している灰色がアンティークのような風貌の鏡を台無しにし、霊的な印象を抱いてしまう。いや、抱かすにはられない。

その前に、いる。鏡よりも僅かに低い背丈の、細身の女性が。その細身の体にぴったりのけれど折れてしまうのではと思わずにはいられないほど細く、雪のように白い腕を後ろ手に鏡に伸ばし、鏡の表面に手を当てている。あたかも、鏡をなでようとするかのように。目を閉じた女性はこの世のものとは思えないほど美しい。妖精、女神、天使。そんな伝説上の生き物に例えてもまだ足りない程の美しさを持つ女性は、永久とも思える時を経て整えられたまつ毛を僅かに揺らし、目を開けた。澄んだ湖のような大きな目は、セミロングとロングの中間あたりの髪と同色の栗色で。それは正しく優しさの具現だった。

女性なら誰もが羨ましがれる髪質の髪を緩やかに揺らし、鏡に向き直る。

「ねえ、若奈」

躊躇いと思われる僅かな間合いの後に女性はポツリと、柔らかで、綺麗な優しい声を小さく開き呟く。その声は修練を積んだ名士が吹くフルートのような綺麗すぎる整った声で。女性の美貌によく似合う、一度聴いたらいつまでも覚えてしまえるであろう声。

「私は貴女のこと嫌いじゃないわ。貴女の願いがこの結果を招く発端だとしてもね。何故なら」

故に誰かに伝えろという明確な意思が備わっているその声の主の気持ちや沈んでいるのは明らかだった。特徴的な、誰が聞いても好意的な声だから。それは酷く明らかで。

けれどここにはもう、そんな彼女の声を聞く者はいない。沈んだ気持ちに気付く者はいない。

「すべての元凶は他の誰でもない、貴女ではない、私なのだから」

序章（3）

血を吐くように、けれどゆっくりと吐かれた綺麗な声はこの世の懺悔と絶望を小さく一つに凝縮させたかのようなどうしようもない悲しみが満ちていた。

女性の表情は泣く寸前の顔で、けれど決して涙を流さないようにしようとするかのように、唇を千切れんばかりに噛みしめ、手を痛みが生じてしまうほど強く握っている。

「貴女が私に語った懺悔は結果論だわ。確かに貴女が言ったような解釈も出来るけれど、それ以外にも様々な解釈が出来る。」

聖書を淀むことなく読む熱心な信者のように、つかえることもなく紡がれる言葉は、他ならぬ女性の懺悔だった。

間違い、けれど、優しかった今はもうどこにもいない彼女達に語る、女性にとつて唯一無二の真実だった。

「雨乞いをした。その後に雨が降った。だから雨乞いをしたから雨が降った。貴方達が語った懺悔は、この延長にすぎない」

彼女達の懺悔の否定。しかしそれは頭ごなしの否定ではなく、母親が子供に語るような、そんな雰囲気。そんな口調。

「全ての原因はこの私。貴方達に偽りの希望を与えてしまった私が原因。罪という鎖で締め付けられたこの私が原因。……だから」

淀むことのなかった女性の言葉が、涙交じりになり、止まる。泣かないように、誰にも泣いていることを気づかれないように口に手を当てて必死に隠そうとする。けれど、そんなことは全く意味が無い。

女性は誰がどう見てもむせび泣いているのだから。

「ごめんなさい。私に泣く資格なんて無いのに。いなくなるのは貴方達では無くて私であるのが最も望ましいのに。……貴方達はただ優しすぎて、自分に厳しすぎただけだったのに」

女性の泣き声は、静かすぎる部屋に、当然のように響き渡る。女

性を責めるこの空間に響く。この空間に差し込む月明かりは罪である女性を消し去るかのように清らかに光り、周囲の闇は女性に絡みつき、かかるはずのない声を、女性に容赦なくかける。

そんな幻想の声に含まれるのは、とてつもない悪意と敵意だけで、僅かばかりの情けも感じられない。

お前のせいだ。

お前のせいで皆不幸になる。

お前は罪だ。

消える。

消えてしまえ。

消える以外に罪を償う方法など無い。

そんな声に、女性は。

「……っ。ごめんなさい。ごめんなさいっ」

綺麗な声で子供ののように、顔がぐちゃぐちゃになってしまう程大量の涙を流しながら。女性はただただ、懺悔の言葉を床にべたりとしゃがみ込んだ状態で呟いていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

そして、終わりは始まる。

序章（3）（後書き）

次からは第一章です。

面白みのない人格の作者で、気のきいた後書きが書けません、こんなわたしに一言でも励ましやアドバイスをください。

どうか、よろしく願いします。わたしなりにこれからも頑張っていきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0606q/>

流れる涙は罪色で

2011年1月10日23時11分発行